第三セッションへのコメント

陳　力　衛

はじめに

言語関係のセッションで扱っている問題はやはり総合テーマの「文化交渉による変容の諸相」にぴったり合っていて、18世紀前半から20世紀初頭までの「西学東漸」という近代化への転換期に注目して、西洋と中国との交渉に伴う思想、文化および両言語の差異を取上げていることである。三人の発表はそれぞれ政論書の翻訳による概念の受容にともなう問題と、初期の中国人向けの日本語教科書に見られる西洋言語学の受容の問題と、そして18世紀フランス人宣教師の記録した中国語から何を読み取れるかといった異なる内容であるが、いずれも現今にとってもっともホットな研究テーマなので、興味の引かれるものばかりである。以下、それぞれについて見てみよう。

一

最初の孫青（関西大学 ICIS PD）氏の「西洋の政治経済学教本の東アジアへの旅―Chambers 編《Political Economics》の東アジアでの数種類の訳本を中心に―」という発表はイギリスの政治経済学の書物 Political Economics の翻訳を通して、日本・中国・韓国という東アジア各国が近代西洋知識の受容においてどういう相異点があるか、そしてどのように自国流に解釈しているかを問題にし、いわば概念史や思想史への照射を念頭に

したものである。つまり、19世紀当時の中国知識人はこの中国語訳の『佐治芻言』（1885）を西洋政治学に関する知的ソースとして利用しているし、しかもその翻訳方法（外国人による口述と中国知識人による筆録）からも近代西洋概念の受容のプロセスを伺える好材料と捉えられている。さらに、後の白話文による重訳が出るほど、中国社会一般に広く影響を及ぼしている重要な書物だと言えよう。

発表者はテキストの比較から着手し、西洋概念が中国語に転換する際に、意図的にその概念をぼかし、あるいは他のものをもって代替しようとする傾向が中国語訳に見られるという。そしてそれによって現代政治学のいくつかの基本概念の中国語における形成が逆に歪な方向を辿っていたと考えているようである。

ただ、その近代概念の形成はそれぞれの言語自身においてまず行われたものであり、現代に立ってそれの形成期におけるいくつかの訳し方が西洋概念を「正確に」伝えていないと非難することができないと思う。本書の口述者、著名な西洋人翻訳家であるフライヤー氏は1890年にすでに指摘したように、初期の翻訳はつねに混乱を伴うもので、ある時期を経てはじめて統一に向かわせたものであるという。そして往々にして一つの漢語訳語は違う訳者によって多くの異なる洋語に対応させられる一方、一つの西洋語は違う訳者によって多くの意味の異なる漢語に訳されることが多いという（王憲明『語言、翻訳与政治―厳復訳「社会通詮」研究』（2005））。ときにはまさに禅宗のごとく、一旦ことばとして表したら、もうその本来の意味からずれて失われた部分が多いようである。したがって、西洋人口述、中国人筆録という翻訳方法によって、概念の伝達に齟齬をもたらす直接の原因とは限らないのである。同じ江南製造局の翻訳に、理科系のものはそうした問題がなく、どうして政論書だけに見られるか、そして同じ人文社会系のマーティンの『万国公法』（1861）はなぜその問題が生じないのか、などを合わせて考えなければ、概念の形成には一概に翻訳方法のせいにするわけにはいかない。逆に、原文の口述による西洋人の中国語文章力と、

文章の翻訳による中国人の理解の両方を比較して新たな発見が見られるだろう。

近代中国においてさまざまな翻訳方法が試されて、厳復の翻訳のように翻訳と創作が一体に融合し、中国文化とヨーロッパ文化を融合させたものがあるから、概念史を辿るにはどうしても先に中国語固有の言い方をもって対訳しているプロセスがあり、それによって思想史研究に困難をつねにもたらすものであると考えられる。この中国語訳の『佐治芻言』にもいろいろ疑問点が残る。なぜ19世紀初頭の英華字典にすでにあった訳語（「法律」など）は使わなかったか、文体的な問題として口語・文章語の優先権をどう捕らえるか、そして細部に至る描写は俗と聖に分けるべきものか、ひいては、語句の選択において西洋人の決め手か中国人の決め手か、といった当時の翻訳状況をもっと明らかにすべき問題が多々ある。

課題として考えると、同じ英書による日本の福沢諭吉の抄訳『西洋事情・外編』（1867）並びに神田孝平の『経済小学』（1867）との比較を必要とするのであろう。そこには同じように発表者の指摘している語句の翻訳のあいまいさも見られる。たとえば日本語でも「経済学」の訳語の定着に至るまでに「利用厚生、富学、理財学」などのゆれが見られた。そして本来、同じ東洋の国においても、日本と中国とでは文化・歴史の違いによって西洋受容のスタイルと方法もなにか異なってくるものがあるかを、比較によって明らかにされるのであろう。それをもってはじめて、近代化を目指す中国の特異性とはなにかを示すことができるだろう。

しかもこの種の研究の面白さは同じ西洋の原文に対して、中国と日本はどういう態度で訳しているかを見比べることができる。方法論的にはたとえばスペンサーの受容に、日本の翻訳とは別に、中国では1882年に顔永京はすでにその教育学著作 *On Education* の第一章を中国語に訳し、『肄業要覧』として上海美華書院によって出版されたし、あるいは1889年、アメリカの学者 *Joseph Haven* の心理学著作 *Mental Philosophy: Including the Intellect, Sensibilities, and Will.* を『心霊学』として訳したりして、完全

に日本とは没交渉で西洋の知識を受容し、紹介しているから、その際の言語（用語、述語）上の違いはそれぞれの土着の文化に準拠していると考えれば、東アジアにおける受容の仕方の比較研究も可能となるわけである。

二

次の鮮明（北京外国語大学外国語研究所博士後期課程）氏の発表は「清朝末期中国人向けの日本語教科書から見た中国、ヨーロッパ及び日本の言語学方法のインタラクション」という題であり、1895年からわずか十余年の間において中国と日本で出された百種近くの日本語教科書を使って、中国では西洋の言語学がいかに吸収されたか、その際に自らの言語の知識がどう働いたかを論じたものである。

一般に、日本語教育の教科書を使って二つの方向で研究されてきた。一つは日本語教育史において、教授法的に、単語や文法教育の進度などを問題にしていること、もう一つは日本語史において、従来の学史的な事項（文法の体系などの記述）がこの教科書にどれほど反映させられるかを検証するものである。本発表は教授法に関心を持つと言いながら、どちらかといえば、この資料を比較文化または文化交流史に使いたかったようです。そうすると、むろん、どういうものが中国人向けにアレンジされ、言語交渉によってどんな変化が見られるかと期待はしたものの、発表者は表題のように英語・日本語・中国語の言語学方法のインタラクションとして捉えたかったものである。

ただ、言語学の発展は明治20年代において一方的に西洋から東洋への組み換えが行われたという事実がある。その点についていまの言語学者が常に反省をしているところだ。そういう意味で発表者の主張する西洋・日本・中国のインタトラクションがないのではなかろうか。逆にそれを裏付けるためにいろいろな教科書から自分の都合に合うような例を探し出すことに違和感があります。松下大三郎の文法が英文法を映し出したのも当たり前

のことで、それをまさしく西洋文法の受容と影響と見なすべきであろう。この西洋の言語学の受容に関して、むしろ日本の教科書を時代順に整理し、どの項目がどのようなテキストを通して入ってきたかを明らかにする必要がある。つまり、ルーツはどこにあるかを捜し求める必要がある。中国における日本語教育史について、徐一平（1997）に指摘されたように、清末において日本語の文法を紹介する書籍がほとんど日本経由の翻訳か編訳本である。たとえば、丁福同訳『中等日本文典訳釈』（1903）、三土忠造『中等国文典』（全三巻、1898初版）、観瀾社訳・難波常雄『漢和対照日本語文法要述』（1906）、芳賀矢一『日本文典』商務印書館編訳所訳（1907）などが挙げられる。

なお、丁福保『東文典問答』（1903）の「東文雑記」において、留学生の必携書として、「落合直文大文典」「落合直文中等文典」「落合直文広文典」「言之泉」「言海字典」（語法指南）などが挙げられている。理屈的にはそれらの資料の中国人の利用の実態を先に明らかにする必要がある。ここに挙げている落合の文法書や大槻『言海』の冒頭に掲げた「語法指南」などが初期の中国語文法にどれほど影響を与えたかを見る必要がある。なぜなら遡れば、1900年の梁啓超の『和文漢読法』の文法体系が上記の文法書との関係をまず明らかにする必要があるからであろう。

言語学史から当時の資料を見ていくと、発表者は西洋の方法論を用いて材料をさばいていくつもりですが、言語学の体系の転換は西洋から日本を経ていかに中国へもっていくかという影響関係において整理する必要がでてくるのではないかと思う。

そして、術語の伝承の問題に、中国語音韻学の知識がテキストに反映されたことは単に方法や道具と考えられるのであろう。「き」の注音に反切を使うのは単字をもって宛てられないから、どうしてもこの方向をもって解釈しなければならない。たとえば明治５年の小栗栖香頂はすでに「き」にあてはめる中国語の漢字がないことに気づき、その点を補う方法として、反切を利用するのは彼自身の学問に裏づけられた自然のなりゆきである。

それは中国語の言語学方法が日本語教科書における応用あるいは「インタトラクション」などとは無関係であろう。

三

最後の発表は千葉謙悟（中央大学助教）氏の「Accentus anima est―来華宣教師プレマールの見た中国語」というものであり、18世紀に来華したイエズス会士プレマール（Prémare）の文法書NotitiaLinguae Sinicaeを通してヨーロッパ言語とは全く異なった系統に属する18世紀前半の中国語に対してプレマールがどのような理解をしていたのかを紹介したものである。

発表者はかつて『或問』において同書の日本語翻訳を連載した実績があり、今回の発表の位置づけもカトリック系の宣教師による中国語の記述がどれほどプロテスタント系の宣教師と関連しているかを明らかにすることに重点が置かれている。そもそもプレマールの著書そのものについての伝承ははっきりしていない。プロテスタントの宣教師たちが後世どうようにその人の記述を受け継いだかも課題として残る。ただ、同書の用例の多くは中国の白話小説からとったところをみると、少なくとも、プロテスタントの宣教師のモリソンの『英華・華英字典』（1815-1823）と一脈通じるところがあろう。その英華の部でも同じく白話小説の用例が多いことがつとに知られている事実である。

だが、同じ白話小説の引用例においてなぜ具体的な人名を伏せて人称代名詞をもって使っているかという疑問が残るが、スタンダードを求めているか、単に自分の作例と見せたかったか、という口語勉強の教科書的性格に由来するところがあるのかもしれない。

最近、こういった宣教師の残された中国語に関する資料の研究が盛んであり、いろいろな成果も挙げられているが、ただ、外国人宣教師による中国語方言音記述について、羅常培は1948年に書いた「耶蘇会士在音韻学上の貢献」や「漢語音韻学的外来影響」において、その信憑性について批判

的な立場をとっていたが、今日のこの分野の研究をみると、逆にその宣教師の記録した音によって中国語方言を復元させようとする研究が多く見られる。そこで危惧しているのは羅氏の指摘していた問題点をクリアせずに、あるいは正面から批判を加えずに、ただ無批判に外国人宣教師の記録を過信し、一方的に「方言」への復元に励んでいることであろう。

おわりに

言語交渉と翻訳問題はさまざまな要素に左右され、且つ多方面にわたるものなので、いろいろなアプローチの仕方が考えられる。三人の発表を聞いていると、基本的に史実の整理を踏まえ、異なる資料について、それぞれより具体的な分析方法を模索しているように見受け取られる。ただし、それも既成の研究方法を補完する意味で関連づけしなければならない反面、新たな方法論の開拓も必要だと感じられる。言語交渉史から概念史の確立まで、さらに思想史への寄与をも視野に入れたスケールのある研究も期待したいものである。